九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

連接する助詞のアクセントについて

木部, 暢子
純真女子短期大学講師

https://doi.org/10.15017/10509

出版情報：文獻探究. 10, pp.63-72, 1982-09-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

連接する助詞のアクセントについて

木部暢子

一

助詞のアクセントについては、以前に北九州市方言を例として述べたことがあった（参考文献①）。それは主として、前接する自立語に対して助詞がどのように付くかであって、助詞同士が連接する場合のアクセントについては、簡単に触れたにすぎなかった。その後、アクセントと文法との関係を見ていくうちに、いくつかの助詞が連接する場合のアクセント、また助動詞と助詞が連接する場合のアクセントを考えねばならないということに気がついた。[注1]

名詞に対して従属式接続をする助詞も、他の助詞に接続する場合には低接式[注2]となることがあり、また動詞に続く場合にも低接する傾向が強いという事実がある。[注3]これは現代東京方言に限らず、他の方言でも一般的に見られる傾向であるようだ。[注4]このような現象は、助詞のアクセントや性格を考える上で、非常に興味深い問題である。

また、文法的な問題としては、

私にはそんなことはできません。

私からよりも、あなたからの方がいいのではありませんか。

という文において、このような助詞の連続をどのようにとらえるか、「私＋に＋は」ととらえるのか、「私に＋は」ととらえるのか、それとも「私＋には」ととらえるのかが問題となろう。

本稿では、このように助詞が連続する場合の取り扱いとその意義を、アクセントの面から考えてみたいと思う。対象とするアクセントは、

北九州市方言（筆者自身の内省に依る）

東京方言（三省堂『明解日本語アクセント辞典』第二版に依る）

の二つが中心となるが、随時、他の方言を参照することにする。ただ、付属語のアクセントとなると諸方言の体系的研究はあまり進んでおらず、助詞の連続がどのようなアクセントになるか、ということになると、比較すべき資料はほとんど出ていない。具体的には、参考文献にあげたものに限られることになるだろう。

アクセントの記号は、わかりやすくするために、高い部分に右傍線を引いて示すことにする。また、下がり目に「」の記号を用いる。

二

北九州市方言の助詞の概略は、前稿（参考文献①）で述べたが、ここにもう一度簡単に示すと次のとおりである。ただし、前稿のものを拍数ごとに整理しなおしてある。

一拍助詞

(a) ノ〔格助詞〕

(c) ガ、オ、ニ、デ、エ、ト〔格助詞〕

ト、カ*、ヤ*〔並列助詞〕

ワ、モ〔係助詞〕

ゾ*、ド*、ゼ*、カ*〔終助詞〕

サ、ネ、ナ、ノ、ヨ〔間投助詞〕

テ〔接続助詞〕

(e) カ*、ヤ*、ノ〔並列助詞〕

ノ、ナ（禁止）、ゾ*、ド*、ゼ*、カ*、ワ〔終助詞〕

ノ〔準体助詞、準副体助詞〕

バ、チ、ト、シ、カ、ガ、ケ〔接続助詞〕

二拍助詞

(b) ヅツ、トモ〔副助詞〕

ツツ〔接続助詞〕

(c) カラ〔格助詞〕

(d) ダケ〔副助詞〕

タラ〔接続助詞〕

(e) ヨリ〔格助詞〕

ヤラ、ナリ、ダノ、トカ〔並列助詞〕

ホド、マデ、ナド、トカ〔副助詞〕

コソ、サエ、デモ、シカ〔係助詞〕

ノデ、ノニ、カラ、ナラ、ケド〔接続助詞〕

三拍助詞

(b) バカリ（程度）、ナガラ〔副助詞〕

ナガラ〔接続助詞〕

(d) バカリ（限定）〔副助詞〕

(e) グライ、ナンカ、ナンテ、ダッテ〔副助詞〕

ケレド〔接続助詞〕

カシラ〔終助詞〕

四拍助詞

(d) バッカリ〔副助詞〕

（注　*印は二カ所に亘って出てくるもの）

北九州市方言の助詞を(a)～(e)の五つに分類したのであるが、それぞれの具体的アクセントは次のとおりである。

	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
風	カゼノ	カゼバカリ	カゼガ	カゼダケ	カゼヨリ
山	ヤマノ	ヤマバカリ	ヤマガ	ヤマダケ	ヤマヨリ
雨	アメノ	アメバカリ	アメガ	アメダケ	アメヨリ
車	クルマノ	クルマバカリ	クルマガ	クルマダケ	クルマヨリ
男	オトコノ	オトコバカリ	オトコガ	オトコダケ	オトコヨリ
心	ココロノ	ココロバカリ	ココロガ	ココロダケ	ココロヨリ
苺	イチゴノ	イチゴバカリ	イチゴガ	イチゴダケ	イチゴヨリ

	(b)	(c)	(d)	(e)
行く	イキナガラ	イッテ	イクダケ	イクノデ
読む	ヨミナガラ	ヨンデ	ヨムダケ	ヨムノデ

つまり

(a)＝接尾辞式接続。(c)に大たい同じだが、尾高型の語に接続すると語末の核を消去する。

(b)＝接尾辞式接続。前接自立語の核を消去し、助詞自身が核を持つ。

(c)＝従属式接続。自立語の式を変えずに付き、助詞自身は核を持たない。

(d)＝従属式接続。(c)に大たい同じだが、助詞自身が核を持つ。

(e)＝低接式接続。助詞自身が直前に核を持つ。

これは前接する自立語との関係からの分類で、助詞が連続する場合のアクセントはまだ考慮に入れていないのであるが、まず最初に北九州市方言の助詞の主な特徴を見ておくことにしよう。

北九州市方言では、(e)が多く、助詞が低接する傾向が強い。それは二拍助詞で著しく、東京方言では従属式(d)に分類される二拍の助詞のほとんどが、北九州市方言で(e)になっている。ただし東京方言でも、これらの助詞が用言に接続する場合には、北九州市方言と同様、低接式になるのが普通である。一拍助詞にも低接傾向が見られ、準体助詞ノは、

ワタシノホン
ワタシ|ノ（私の物）
ミセノシナモノ
ミセ|ノ（店の物）
キノーノコト
キノー|ノ（昨日の事）

オバサンノウチ
オバサン|ノ（おばさんの物）
アシタノアサ
アシタ|ノ（明日の事）

のように、格助詞のノとはアクセント的に区別される。三拍助詞でも、グライ、ナンカ、ナンテ、ダッテなど、東京方言では(d)に分類されるものが、北九州市方言では(e)に入っている。

三

助詞がいくつか連続する時に、そのアクセントはどのようになり、また問題点はどのような所にあるのか。北九州市方言を例にとって具体的に見ていくことにしたい。

その前に、いくつかの助詞が連続する時に、それをどのような基準で見ていくのがよいかの問題がある。私は拍数を基準にして見ていくのがよいと思う。ひとつには、諸方言を比較する時に最も客観的な基準たりうるからであり、またひとつには、助詞のアクセントには拍数が大きく関係しているからである。基本アクセントということを、外来語のアクセントや非日常語のアクセントなどの時によく言うが、その基本アクセントは外来語や非日常語に限らず、助詞には助詞の基本アクセントのようなものがあって、例えば東京方言では一拍助詞は無核の従属式が基本型、二拍助詞はマイナス二拍目に核のある従属型が基本型、三拍助詞はマイナス三拍目に核のある従属型が基本型、というように拍数によって助詞のアクセントがある程度決まってくるのではないかと思っている。北九州市方言では、一拍助詞は無核の従属式、二拍助詞は低接式、三拍助詞はやはり低接式が基本型ということになろうか。

それでは、拍数ごとに整理した、助詞の連接する場合のアクセン

トを示すことにしたい。なお本稿では、間投助詞と終助詞とは考察の対象から除くことにした。

〔1〕 一拍助詞＋一拍助詞

①ニワ、デワ（ジャー）、トワ、ニモ、デモ、エモ、トモ、オモ（(c)の助詞＋(c)の助詞）

②ノが、ノニ、ノオ、ノデ、ノト、ノワ、ノモ（(e)の助詞＋(c)の助詞）

③トノ、デノ、エノ（(c)の助詞＋(e)の助詞）

北九州市方言では、この三つは

⑦ カゼニ　ワタシニ　ヤマニ　アメニ（雨）
　カゼニワ　ワタシニワ　ヤマニワ　アメニワ

② ワタシノ　オバサンノ
　ワタシノが　オバサンノが

③ カゼト　ワタシト　ヤマト　アメト
　カゼトノ　ワタシトノ　ヤマトノ　アメトノ

のようになる。これらは東京方言では、

①カゼニ　②ワタシノが　③カゼトノ

の如く、助詞の間に核が来る。上野善道氏に依れば、松江市方言や富山県氷見市方言でも東京方言と同じような型になるそうで（参考文献③、④）、上野氏は「無核の付属語が連続すると、その間に核が挿入されるという規則」（参考文献④）を立てておられる。北九州市方言では②は前の一拍助詞ノがもともと低接式の助詞だから、東京方言などの場合とはやや事情がちがうが、①と③は多少問題である。①も③も前の一拍助詞は単独では従属式接続をするのに、後に他の一拍助詞が続くと、とたんに低接式に変わるからだ。北九州市方言では、東京方言のような

(0) 無核の助詞が連続すると、その間に核が挿入される。

という規則ではなしに、

(1) 無核の一拍助詞に一拍助詞が連接すると、前の無核の助詞は直前に核を持つ型に変わる。

という規則を立てねばならない。

〔2.1〕 二拍助詞＋一拍助詞

④カラが、カラオ、カラニ、カラデ、カラワ、カラモ（(c)の助詞＋(c)の助詞）

⑤カラノ（(c)の助詞＋(e)の助詞）

⑥ヅツが、ヅツオ、ヅツニ、ヅツデ、ヅツワ、ヅツモ（(c)の助詞＋(c)の助詞）

⑦ダケが、ダケオ、ダケニ、ダケデ、ダケト、ダケワ（(c)の助詞＋(c)の助詞）

⑧ヨリワ、ヨリモ、ホドワ、ホドモ、ホドニ、ホドデ、マデワ　マデモ、マデニ、ナドワ、…（(e)の助詞＋(c)の助詞）

⑨ホドノ、マデノ、ナドノ、トカノ（(e)の助詞＋(e)の助詞）

④ ミチカラ　ワタシカラ　ヤマカラ　ソラカラ
　ミチカラが　ワタシカラが　ヤマカラが　ソラカラが

⑤ ミチカラノ　ワタシカラノ　ヤマカラノ　ソラカラノ

⑥ ヒトリ|ツツ　フタリ|ツツ　サン|ニン|ツツ
ヒトリ|ツツガ　フタリ|ツツガ　サン|ニン|ツツガ

⑦ ミチ|ダケ　ワタシ|ダケ　ヤマ|ダケ　ソ|ラダケ
ミチ|ダケワ　ワタシ|ダケワ　ヤマ|ダケワ　ソ|ラダケワ

⑧ ミチ|ヨリ　ワタシ|ヨリ　ヤマ|ヨリ　ソ|ラヨリ
ミチ|ヨリワ　ワタシ|ヨリワ　ヤマ|ヨリワ　ソ|ラヨリワ

⑨ ミチ|ホド　ワタシ|ホド　ヤマ|ホド　ソ|ラホド
ミチ|ホドノ　ワタシ|ホドノ　ヤマ|ホドノ　ソ|ラホドノ

さきに(I)のような規則を立てたので、今度は④の場合のような、二拍の無核助詞が気になる。ところがこれは東京方言と同じように二つの助詞の間に核が挿入された型となっている。そこで、

(II) 無核の二拍助詞に無核の一拍助詞が連接すると、その間に核が挿入される。

という規則も必要になってくる。北九州市方言では、準体助詞・準副体助詞のノはもともと低接式であるから、⑤のような場合には、

(III) 無核の助詞に有核の助詞が連接すると、後の助詞の核が実現する。

という規則が必要になってくる。また⑥〜⑧の場合には

(IV) 有核の助詞に無核の助詞が連接すると、前の助詞の核が実現する。

という規則を立てればよいし、⑨では、

(V) 有核の助詞が連続すると、最初の核のみが実現する。

という規則を立てればよいだろう。

〔2.2〕 一拍助詞＋二拍助詞

⑩ オダケ、ニダケ、エダケ、トダケ（(c)の助詞＋(d)の助詞）
⑪ オヨリ、オヤラ、オナリ、オダノ、オトカ、オナド、オコソ、オサエ、オデモ、オシカ、ニヨリ、ニヤラ、ニナリ、ニダノ、ニトカ、ニナド、ニコソ、ニサエ、ニデモ、ニシカ、ニヨリ、デヨリ、デヤラ、デナリ、ニダノ…（(c)の助詞＋(e)の助詞）
⑫ ノカラ（(e)の助詞＋(c)の助詞）
⑬ ノダケ（(e)の助詞＋(d)の助詞）
⑭ ノヨリ、ノヤラ、ノナリ、ノダノ、ノトカ、ノホド、ノマデ、ノコソ、ノサエ、ノデモ、ノシカ（(e)の助詞＋(e)の助詞）

⑩ カゼオ|ダケ　ワタシオ|ダケ　ヤマ|オ　ア|メオ
⑪ カゼオ|ヨリ　ワタシオ|ヨリ　ヤマ|オヨリ　ア|メオヨリ

⑫ ワタシ|ノカラ　オバサン|ノカラ
⑬ ワタシ|ノダケ　オバサン|ノダケ
⑭ ワタシ|ノヨリ　オバサン|ノヨリ

⑩、⑪は無核の助詞と有核の助詞との連続で、後の助詞の核が保存されているから、(III)の規則が適用される。また⑫は有核の助詞と無核の助詞の連続で、前の核が保存されているから、(IV)の規則が適用され、⑬、⑭では有核の助詞同士の連続で、前の核が実現しているから、(V)の規則が適用される。

〔3.1〕

一拍助詞＋三拍助詞

⑮ニバカリ、デバカリ、トバカリ（(c)の助詞＋(d)の助詞）

⑯ニグライ、デグライ、トグライ、ニナンカ、デナンカ、トナンカ、ニナンカ、デナンカ、トナンカ（(c)の助詞＋(e)の助詞）

⑰ノバカリ、ノグライ、ノナンカ、ノナンテ（(e)の助詞＋(d)、(e)の助詞）

⑮ミチニ　ワタシニ　ヤマニ　ソラニ

⑮ミチニバカリ　ワタシニバカリ　ヤマニバカリ　ソラニバカリ

⑯ミチニグライ　ワタシニグライ　ヤマニグライ　ソラニグライ

⑰ワタシノ　オバサンノ

⑰ワタシノバカリ　オバサンノバカリ

⑮、⑯は(Ⅲ)の規則が、⑰は(Ⅳ)の規則が適用される。

〔3.2〕

三拍助詞＋一拍助詞

⑱バカリガ、バカリオ、バカリニ、バカリデ、バカリト、バカリワ（(d)の助詞＋(c)の助詞）

⑲バカリノ（(d)の助詞＋(e)の助詞）

⑳グライガ、グライオ、グライニ、グライデ、グライワ、グライモ、ナンカガ、ナンカオ、ナンカニ、ナンカデ、ナンカト、ナンカワ、ナンカモ（(e)の助詞＋(c)の助詞）

㉑ナンカノ、グライノ（(e)の助詞＋(e)の助詞）

㉑カゼバカリ　ワタシバカリ　ヤマバカリ　アメバカリ

⑱カゼバカリガ　ワタシバカリガ　ヤマバカリガ　アメバカリガ

⑲カゼバカリノ　ワタシバカリノ　ヤマバカリノ　アメバカリノ

ミチグライ　ワタシグライ　ヤマグライ　アメグライ

⑳ミチグライガ　ワタシグライガ　ヤマグライガ　アメグライガ

㉑ミチグライノ　ワタシグライノ　ヤマグライノ　アメグライノ

⑱、⑳には(Ⅲ)の規則が適用され、⑲、㉑には(Ⅳ)の規則が適用される。

〔3.3〕

二拍助詞＋二拍助詞

㉒ヅツヨリ、ヅツヤラ、ヅツナリ、ヅツダノ、ヅツトカ、ヅツマデ、ヅツナド、ヅツサエ、ヅツデモ、ヅツシカ（(d)の助詞＋(e)の助詞）

㉓カラダケ（(c)の助詞＋(d)の助詞）

㉔カラヨリ、カラナリ、カラダノ、カラトカ、カラナド、カラコソ、カラサエ、カラデモ、カラシカ（(c)の助詞＋(e)の助詞）

㉕ダケデモ、ダケヨリ（(d)の助詞＋(e)の助詞）

㉖ホドマデ、ホドデモ、ホドシカ、マデナド、マデトカ（(e)の助詞＋(e)の助詞）

㉒ヒトリヅツ　フタリヅツ　サンニンヅツ

㉒ヒトリヅツヨリ　フタリヅツヨリ　サンニンヅツヨリ

㉓ミチカラ　ワタシカラ　ヤマカラ　ソラカラ

㉓ミチカラダケ　ワタシカラダケ　ヤマカラダケ　ソラカラダケ

㉔ミチカラヨリ　ワタシカラヨリ　ヤマカラヨリ　ソラカラヨリ

㉕ミチダケ　ワタシダケ　ヤマダケ　アメダケ

㉕ミチダケデモ　ワタシダケデモ　ヤマダケデモ　アメダケデモ

ミチ」ホド　ワタシ」ホド　ヤマ」ホド　ア」メホド
㉖ミチ」ホドマデ　ワタシ」ホドマデ　ヤマ」ホドマデ　ア」メホドマデ
（ミチホド」マデ　ワタシホド」マデ）

㉓、㉕、㉖には(V)の規則が適用され、㉓、㉔には(III)の規則が適用される。ところが㉖には問題がある。じつは私自身もへ）で示した方と㉖とのどちらなのか、覚束ない。上野氏も二拍助詞の連続する場合のアクセントにゆれのあることを言っておられる（参考文献③）ので、何も北九州市方言に限った現象ではないらしい。おそらく、このような助詞の連続が日常会話に上ることがさほど多くないためと、プロミネンスをどこに置くかの違いによって、アクセントが一定しないのだろう。

このうち、ホドマデ、ホドデモ、ホドシカの三つは、助詞ホドの性質によってアクセントの違いが現われると思われる部分もある。この三語が指示語コレ、ソレ、アレに付いた時には、

コレホド」マデ、ソレホド」マデ、アレホド」マデ
コレホド」デモ、ソレホド」デモ、アレホド」デモ
コレホド」シカ、ソレホド」シカ、アレホド」シカ

であって、コレ」ホドマデのようには絶対にならない。一方ホドが単独でコレ、ソレ、アレに付く時には、

コレホド　ソレホド　アレホド
コレ」ホド　ソレ」ホド　アレ」ホド

と両形があるが、この両形には多少、意味の違いがある。コレ」ホド、ソレ」ホド、アレ」ホドが「コレ、ソレ、アレ」＋「ホド（強調）」という風に意識されるのに対して、コレホド、ソレホド、アレホドの方は一語の副詞となっていて、程度を表わしているという意識が強い。

㋑コレホド練習したのにちっともうまくならん。
㋺コレ」ホド練習したのにちっともうまくならん。
㋩コレホドいい物（モン）は他にない。
㋥コレ」ホドいい物は他にない。

この四つの例文のうち㋺は存在しない。㋺が無理なのは、コレ」ホドという語が「コレ」＋「ホド（強調）」を表わす（しか表わさない）から、程度を表わすことばを受けようと待ちかまえている「練習した」にはかかることができないからだと考えられる。そうだとすれば、ホドには程度を表わす接尾辞と強調を表わす助詞との二種類があり、この二者はアクセントを異にしているということになる。（副助詞にはこのようなものが多く、他にも検討を要するものがあるかもしれない。）先に見たコレホド」マデ、ソレホド」マデ、アレホド」マデなどの語が、このアクセントでゆれないのも、この場合のホドが助詞ではなく副詞を形づくる接尾辞として働いているからだと考えられる。逆にホドがコレ、ソレ、アレ以外の語に付いた時にゆれが生ずるのは、ホドが接尾辞として働いているのか、助詞として働いているのかという文法段階での違いをそのまま反映したものと思われる。

(3.4)　一拍助詞＋二拍助詞＋一拍助詞

㉗オヨリワ、オヨリモ、ニヨリワ、ニヨリモ、トヨリワ、トヨ

リモ、デヨリワ、デヨリモ、ニマデワ、ニマデモ、ニナドワ、ニナドモ、トナドワ、トナドモ、ニトカワ、ニトカモ、ニコソワ、ニサエモ、デサエモ（(c)の助詞＋(e)の助詞＋(c)の助詞）

㉘ノヨリワ、ノヨリモ、ノホドワ、ノホドモ、ノマデワ、ノマデモ、ノナドワ、ノナドモ、ノナドガ、ノトカワ、ノトカモ、ノコソワ、ノサエモ（(e)の助詞＋(e)の助詞＋(c)の助詞）

㉗ミチオ　ワタシオ　ヤマニ　ソラニ
ミチオヨリワ　ワタシオヨリワ　ヤマニヨリワ　ソラニヨリワ

㉘ワタシノ　オバサンノ
ワタシノヨリワ　オバサンノヨリワ

連接する助詞が三つになっても、さきの(I)〜(V)の規則で処置をすることができる。㉗は(III)と(IV)の規則の適用、㉘は(V)と(IV)の規則の適用である。

〔3.5〕　二拍助詞＋一拍助詞＋一拍助詞

㉙カラデワ（カラジャー）（(c)の助詞＋(c)の助詞＋(c)の助詞）

㉗ミチカラ　ワタシカラ　ヤマカラ　ソラカラ
ミチカラデワ　ワタシカラデワ　ヤマカラデワ　ソラカラデワ

これは(II)の規則と(IV)の規則との適用とも考えられるが、後の二つの助詞が融合して「カラジャー」となることを考えるなら、まず後の二つに(I)の規則が適用されてデワ（ジャー）が低接式の助詞となった時点で(III)の規則が適用されたと考えた方がいいだろう。

以下、助詞が連続して五拍の連接助詞を作る場合もあるが、この時も先の(I)〜(V)の規則で処理できるので省略させていただく。ただひとつ取りあげておかなければならないのは、次のような場合である。

㉚カラデサエ（(c)の助詞＋(c)の助詞＋(e)の助詞）

㉚ミチカラ　ワタシカラ　ヤマカラ
ミチカラデサエ　ワタシカラデサエ　ヤマカラデサエ

これは、先に(II)の規則を適用してカラ」デという型を作っておいて、次に(IV)の規則を適用すると右のようなアクセントになるが、逆に、先に(III)の規則を適用してデ」サエという型を作って次にまた(III)の規則を適用すると、右のようなアクセントにはならず、

ミチカラデサエ　ワタシカラデサエ

のような、北九州市方言ではあり得ない型になってしまう。つまりカラデサエという助詞の構造が「カラ＋デサエ」ではなくて「カラデ＋サエ」であるということを、アクセントが表わしていると考えられる。

助詞が連接する時のアクセントを、(I)〜(V)の規則を立てて見てきたが、じつはその前に、もう一つ重要なものを入れなければならなかった。それは、

(A)　後にいくつ助詞が連接しても、第一番目の助詞の式（接尾辞式、従属式、低接式）は保存される。

という規則である。助動詞には方言によっては、前の助動詞の式を無効にし、核を「引寄せる接辞」[注5]もあるということだが、北九州市

方言の場合は東京方言と同じように、助詞でも助動詞でもアクセント核の「引寄せ」は見られない。ただし、(I)は(A)の規則の例外となる。(A)も含めて、北九州市方言で助詞が連接する時の規則を、もう一度ここに示してみよう。

(A) 後にいくつ助詞が連接しても、第一番目の助詞の式（接尾辞式、従属式、低接式）は保存される。

(I) ただし(A)の例外として、無核の一拍助詞に一拍助詞が連接すると、前の無核の助詞は直前に核を持つ型に変わる。

(II) 無核の二拍以上の助詞に無核の助詞が連接すると、その間に核が挿入される。

(III) 無核の助詞に有核の助詞が連接すると、後の助詞の核が実現する。

(IV) 有核の助詞に無核の助詞が連接すると、前の助詞の核が実現する。

(V) 有核の助詞が連続すると、最初の核のみが実現する。

四

前章でいちばん問題となるのは、規則(I)だろう。東京方言や松江市方言などでは(0)の規則ひとつですむところを、北九州市方言では規則(I)が変則的なため、規則(I)と規則(II)の二つの規則が必要となっている。北九州市方言の規則(I)は、どういう意味を持つのか。

それはおそらく、前章の最初に書いたような、助詞の基本型というものと深く関係していると思われる。北九州市方言では、二章で書いたように、二拍助詞はそのほとんどが低接式(e)式で、助詞自身が核を持つ(d)式の多い東京方言と大きな違いを見せている。このため、「ニワ、デワ……」の類もそれに引かれて低接式となったのだろう。このことは、「ニワ、デワ……」の類が二つの助詞の連続したものではなしに、すでに二つの部分に切り離すことのできない、二拍の助詞として働いていることを示している。東京方言で「ニワ、デワ……」の類が規則(0)によって「ニ」ワ、デ」ワ……」となるのは、二拍助詞の基本型が東京方言で○」○型であるということと、やはり関係があるだろう。東京方言でも、基本型に合わせる形で「ニワ、デワ……」のアクセントがおちついている。

一方、同じ無核の助詞の連接でも、「カラガ、カラニ……」の類になると、北九州市方言も東京方言と同じように、二つの助詞の間に核が挿入されている。これは、「カラガ、カラニ……」の類が「ニワ、デワ……」の類と違って、三拍の助詞としては働いていないからだろう。ちなみに、三拍助詞の基本型は、北九州市方言で低接式○○○と見てよいだろうが、「カラガ、カラニ……」の類も完全に一語の三拍助詞と意識された時には、この型になるものと思われる。「ワタシ」カラワのような発音を全く聞かないわけでもない。

また、この時、東京方言でも北九州市方言でも、二つの助詞の間に核が挿入される――後のつが、オ、ニ、デ、ワ、モ」の直前に核が挿入される――のは、これらの助詞が名詞に接続する時には従属式接続でも、動詞に接続する時には低接式となるという事実と関係があるだろう（注3参照）。つまり「が、オ、ニ、デ、ワ、モ」等

の助詞は、文節の上位に位置すれば無核の従属式接続の助詞であるが、文節末尾に位置すると低接式になるという性質をもともと持っているのである。他の助詞に下接するということは、動詞に接続する場合と同じく、文節末尾に位置することを意味している。

その他、問題点はまだあるが、この辺で終えることにしたい。このような助詞の連続する場合のアクセントが明かになれば、日常会話により近い形の資料が得られるわけだし、また助詞の性格も明かになる部分が多いと思っている。

注

（1）参考文献②、③、④に負うところが大きい。

（2）従属式、低接式などの用語については、二章参照のこと。

（3）東京方言で例をあげると

（名詞）カゼヨリ

（動詞）イクヨリ

（助詞）ワタシノヨリ

のような違いがある。

（4）参考文献⑥参照。参考文献⑤の437ページ、439ページなどによると、平曲でもこのような傾向が見られるという。

（5）参考文献②による。

参考文献

①拙稿「北九州方言のアクセント――助詞・助動詞――」（『純真紀要』21号　昭和55年12月）

②早田輝洋氏「大分県臼杵市方言のアクセント――用言の活用を中心にして――」（『長谷川松治教授古稀記念論文集』　昭和56年12月）

③上野善道氏「松江市方言のアクセント――付属語を中心に――」（『金沢大学日本海域研究所報告』第13号　昭和56年11月）

④上野善道氏「富山県氷見市方言のアクセント」（『日本海文化』第9号　昭和57年3月）

⑤奥村三雄氏『平曲譜本の研究』（桜楓社　昭和56年5月）

⑥奥村三雄氏「辞の形態論的性格」（『国語国文』25・9　昭和

――純真女子短期大学講師――